

企業モノ語り

畳職人道具

有限会社 佐藤たたみ工房

代表取締役 佐藤豊三 さん

【鶴見支部会員企業】

別府市大畑3組

TEL 0977-25-1718



畳職人の仕事は、重いものも担ぐし、いつも汚れる。でも、部屋がきれいになれば、それだけで気持ちがいい。



今年で創業41年を迎えた別府市の有限会社佐藤たたみ工房。社長の佐藤豊三さんが、創業者である父親の後を継ぐことを決めたのは高校卒業後でした。「いつも父の仕事ぶりを傍から見ていましたからね。誰に促された訳でもなく、自然と職人の世界に魅かれていきました（佐藤さん）」

日本有数の観光地である別府に立地する同社ですが、毎年、11月になると地元のホテルや旅館から、畳の張替え依頼が一斉にあります。

「客間から大広間まで、短期間ですばやく作業を終えなくてはいけないので大変ですよ。毎年の恒例行事ではありますがね」

かつては、ホテルに機械を持ち込み、大宴会場200畳分の張替えをおこなったこともあるそうです。

職人歴20年になる佐藤さんが、仕事を始めた当時の畳職人の世界は、手縫いと機械作業がちょうど半分の割合だったそうです。

「材料や微妙な寸法調整は、手縫いだからこそ可能な技術です。しかし中途半端な職人技なら機械のほうがいいですよ。人間と違って文句も言わないですからね（笑）」

そう話しながら、畳職人が大切に使う3つの道具

を見せてくれました。まず包丁と大きな針、そして大曲（おおがね）。大曲とは、畳の幅と同じくらいの長さがある三角定規のようなもので、古くから畳職人の世界では直角を測る道具として重宝されてきたものです。現在は木製からステンレス製になり、作業工房に必ず置かれています。

かつては手縫いが基本だった畳づくりも、最近はデジタルオートメーション化された機械による作業がほとんどです。包丁や針、大曲を使う機会も以前に比べると少なくなりました。しかし、同社では、いまだに年末年始に3つの道具を奉り、餅をそなえています。

「畳職人の基本道具ですから、使わないからといっておろそかにはできません。いい道具があつてこそ、いい仕事ができる。それは昔も今も変わらないものだと思うんです」

ときに口論や意見の対立があつても、職人としての父親を尊敬しているという佐藤さん。

「2歳になる息子が、できれば自分の姿を見て、この仕事を継いでくれれば幸せですね」

い草の香りがする作業場で、職人・佐藤さんは今日も汗を流しています。